拙著『津軽のカミサマ』への書評に答えて

池上　良正

生まれて初めて単独の著書などというものを公刊して，ほぼ1年が過ぎた。著者はもとより題材も出版社もマイナーだから，どうせたいした反響はないだろうと思っていたところ，予想以上の注目を浴びて驚いている（もっとも，部数自体はさほど売れたわけではありませんが）。自分自身のこれまでの仕事が多少なりとも認知されたという個人的な誇らしさや嬉しさは勿論ある。が，それと同時に，このような特殊な分野に対する現代社会の関心が相当に深いことを再認識させられた。その意味でも，宗教学という学問領域の存在意義を世にアピールできたことは，稚拙な試行錯誤の段階であれ，無理をして一冊の本にまとめた甲斐があったと思っている。

本誌でも，奥山倫明氏による懇切な，そしてきわめて好意的な書評をいただいた。このような習作的な書物を丁寧にお読みいただ

き，御批評いただいたことに対し，まず深く感謝申し上げたい。

氏の御努力に報いるためにも，いくつかの疑問点にお答えしなければならないと思うが，正直のところ自信はない。もちろん執筆時には全力を傾けたつもりであったが，自分でも勉強不足のまま「気合い」で書いてしまった部分もあり（「霊が憑依して」とは言わないが），校正段階では，すでに指摘されたような欠陥はみずから感じていたからである。むしろ，氏を含めて多くの方々から寄せられた批評を吟味することによって，私自身の今後の研究の道程を様々な角度から照らし出していただくことができた，というのが現時点での率直な感想なのである。

本誌における奥山氏の書評では，主として小さな疑問点が二つと，拙著の根幹にかかわるような大きな疑問点一つが提示されていたように思う。

まず，比較的小さな疑問点の第一について。それは，「救いのモデル」の構想において，性善的作用を及ぼすものとしての超人間的・超俗的な神々や，性悪的作用を及ぼすものとしての霊的存在から抽出されたモデルを示すのに，「人格作用」という術語が適切かどうか，さらに「人格」「超人格」「非人格」等の汎用される概念についての説得的な説明が欠けているのではないか，という点である。

「人格」「非人格」の対比は，フレーザーの古典的呪術先行論をもち出すまでもなく，問題の多い概念である。このモデル化に際して，私自身も使うべきか否か迷った言葉であった。ただ，これは言うまでもないことなのかもしれないが，ここでの「人格」「非人格」には，フレーザー流の「宗教」と「呪術」を峻別する基準といった本体論的発想はない。むしろ，性善であれ性悪であれ，人間の側からの働きかけや対話に，相応の反応がありうると考えられている作用と，「運命」「宿業」「因縁」のように，人間の側からの情意的な働きかけに全く無関係な筋書きにおいて，人間に影響を及ぼしてくると考えられている作用とを，何らかの言葉で区別したかった，ということである。もっとも，後者の必然的筋書きについても，その相対的なモデル化のなかでは，人間の側からの働きかけを受けて相応の変更が可能だと言っているのだから，「人格」「超人格」といった用語はたしかに曖昧さを残すかもしれない。モデル自身を含めて，今後さらに検討し，適切なものに改めていきたい。

次に小さな疑問点の第二について。それは，近年の災因論に占める「先祖・ホトケ」の割合が高くなってきているという叙述を，歴史的変化と読みとってよいのか，そうした判断の根拠が本書では不足しているのではないか，というものである。

この疑問は比較的答えやすい。私自身は，この現象を注目すべき近年の歴史的変化と受けとめている。

本書で欠けていた証拠を補うため，ひとつの事例を紹介しよう。赤倉において戦前に堂社を築いた古株のカミサマのひとりに，青森市のS（男性）がいる。この人は明治10年頃の生まれで，昭和20年8月に死亡し，戦後はひとり娘がカミサマとして父親が残した信者とともに堂を維持してきたが，この娘も昭和57年に80歳で病死した。この親子のカミサマで注目されるのは，祈禱や判断において，いわゆる災因論を担う部分が，ほとんどイズナ憑きとして説明されていた点である。先祖や水子の障りといった判断は滅多になく，稀にそうした災因が語られる場合は寺に行くように指示されたという。「カミの道とホトケの道は違うから」である。イズナはここでは狐とほぼ同義と見られ，男に対しては女に，女に対しては男に化けて取り憑いてくるとされ，硬貨を数枚拾わせてみると，イズナが憑いた人は拾えない。また，帯をほどかせて再び結ばせてみると，イズナ憑きのような魔物はほどくことは簡単にするが，結ぶことができないといって，こうした方法で判定が行なわれた。また，連れてこられた人が突然暴れ出し，祓い除こうとするカミサマとのあいだで激しい修羅場を演ずることも多かったという。この父娘二代にわたるカミサマのイズナ

祓いの法は特に有名で，近隣から多くの依頼客で繁昌した。ところが，戦後の時代状況のなかで，こうしたイズナ一辺倒の災因論が次第に信憑性を失い，依頼客の数を減らしていったのである。一部の古くからの信者たちは，むしろ熱烈に二代目である娘のカミサマを信奉し，いわば「イズナ災因共同体」ともいうべき講として団結を強めたが，そのことが逆に，講の閉塞化を招き，カミサマ業の本領ともいうべき一般依頼者への解放的特性が失われてしまったようである。このようなかたちで凋落したカミサマを，私は他にも二例ほど知っている。先祖の因縁を前面に打ち出したり，イタコにかわって積極的にホトケオロシ（死者の口寄せ）を採用したカミサマが，相変わらず多くの依頼客を獲得しているのに対し，こうした動物霊の憑依のみに固執した祈禱者たちの凋落は，第二次大戦後のひとつの時代変化を象徴的に示していると，私は思う。

なお，この問題については，戦前・戦後を通して，地方新聞紙上に登場するカミサマの摘発記事の実態などからも傍証できそうである。そうした資料は鋭意収集中であり，別の機会に詳しく御紹介したいと考えている。

さて，最後に最も本質的な疑問に答えなければならない。

それは，相対的で個別主義的な救いと，絶対的で普遍主義的な救いとは，宗教の救いのなかでどのように区別されるのか，という「問い」として提起されている。さらにそれは，カミサマ信仰の救いを特徴づけているからには，著者にも救いの概念についての何らかの全体的な枠組みがすでに前提されていたのではないか，そして，「救いの文化論」に限定した研究態度がひとつの戦略として認められるとしても，やはりそれは「救いの本質論」と無関係ではありえないのではないか，という根本的な疑問に収斂することになる。この点については，奥山氏以外の方々からも多くの批判を受けた。「救いの構造をたずねて」という副題を付すからには，やはり宗教学レベルでの一定の「救い」の仮設的定義が必要ではなかったのかと。

おそらく，これは言われる通りなのであろう。「宗教学の立場にこだわりつづける」などという羊頭をかかげながら，「救いの文化論」を「救いの本質論」とは全く別の課題であるかのような印象を与える書き方をしたのは，たしかに不適切であったと思っている。ただ，私が言いたかったのは，「文化」を離れて「本質」は語れないのではないか，という点である。純粋な教義学や神学の立場から追求された理念的救済論を別にすれば，宗教学が対象とする「救い」は，つねに具体的宗教現象として，特定の時代や地域に規定された「文化」的現象として立ち現れる。「本質」をはずして「文化」はないが，逆に「文化」をはずして「本質」もない。その意味で，奥山氏も示唆されるように，「救いの文化論」と「救いの本質論」とは，つねに表裏一体のものとして捉えられねばならないのであろう。

氏は私が本書で示したカミサマ信仰の「救い」の過程に似て，宗教学における「救い」の理論研究もまた，一種の螺旋階段に喩えることができるのではないか，と結んでおられる。この喩えに従えば，私は『津軽のカミサマ』を書くことによって，何とかこの階段の最下層を一巡りできた，ということになろうか。今後に残された人生の時間のなかで，この螺旋階段を何周まわることができるかは分からないが，当面は，「文化」の形状を通して「本質」に迫るという研究の姿勢を堅持しつつ，さらに一段ずつ前進してみたいと思っている。（1988年8月16日稿）